
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 15

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 281.オランダに来てから変化する夢の質
- 282.オランダのIKEA
- 283.環境適応とシステムの発達
- 284.生活リズムの創出
- 285.純粹経験からの出発
- 286.次なる発達段階への道:システム構築の手法について
- 287.動的な運動を生み出すバランスボールの効用
- 288.卓越性の起源
- 289.悠久の時の中で
- 290.欧州小旅行計画
- 291.閉ざされた感覚を解放して
- 292.反復と差異の混在する日々の中で
- 293.共存在空間
- 294.組織のイノベーションについて:創造性理論とシステム理論の観点より
- 295.フローニンゲン大学の大学図書館
- 296.叡智からの排斥
- 297.「発達理論」なるものについての誤解
- 298.予知夢と時の扉
- 299.自己超出の時へ
- 300.「美」と「組織のイノベーション」に関する脱神秘化

281. オランダに来てから変化する夢の質

この感覚はしばらく忘れていたのであるが、私は新しい環境に身を置くと共に、睡眠中の夢の質が大きく変わるのである。五年半ほど前に日本からアメリカに渡った時もそうであったし、昨年アメリカから日本に戻ってきた時も、環境を変えた直後の何日かは夢の質に変化が見られたのである。

オランダに来てから早いもので十日近く経つが、この期間に見た夢の特徴は二つある。一つ目は、イメージを生み出す無意識のより深いところに自己が沈んでいき、豪華絢爛かつ多様なイメージが知覚されるということである。基本的に、通常期に見る私の夢は白黒なのだが、このところは、特に深い入眠に入る直前にサトル意識(subtle consciousness)に参入し、そこで色彩に富み、なおかつ無数のイメージが蠢くのを夢の中で知覚するのである。

私が初めてこの現象に出くわした時は、正直なところ、自分の意識世界の中で何が起きているのか理解できず、ひどく驚いたのを覚えている。知覚されるイメージの変化速度はあまりにも速く、その変化の動きに認知的自己は付いていくことが全くできず、イメージを解釈する余裕などほとんどない。

自己にできることは、認知的自己の機能を緩め、尋常ではない速度で移り変わる無数のイメージをただただ眺めるだけなのである。イメージの流れに変更を加えようとしたり、意味的解釈を施そうとするのではなく、それらの千変万化する色彩の富んだイメージの大海に自己を預けることが賢明だ、ということに気づいた。

後々になってわかったが、ここで下手にイメージの世界に耽溺すると、禅で言うところの「魔境」に囚われることになる。こうした意識の状態変化は、意識進化の過程で必ず見られる通過的プロセスに過ぎないのだ。

夢の特徴の二つ目は、攻撃性である。通常期においても、三ヶ月に一度ぐらいのペースで、自分の攻撃性を爆発させるような夢を見るのであるが、オランダに来てからその頻度が高まっている。夢の中で攻撃性を放出するというのは、極めて重要かつ健全なことだと私は思う。

というのも、動物である人間として自己が本来備えている攻撃性を発揮する機会というのが、現代社会においては圧倒的に欠落しているように思えるからだ。言い換えると、本来、私たち人間には攻撃的(暴力的)な特性が不可避に備わっているにもかかわらず、私たちは現代社会においてそれらを過度に抑圧しているように思えるのだ。

思うに、代表的なものとして、突然キレ出すという現象は、まさに私たちが内在的な攻撃性を過度に抑圧した結果、それが思わぬ形で不健全に爆発してしまうことに起因しているのではないだろうか。

こうしたことを考えると、表面的には平静に思える現代の日本社会において、あるいは、平穏に思える現代社会にいるからこそ、私たちは自己の攻撃性と定期的に向き合い、それを解消し、自分は攻撃性を持った健全な人間であるという自覚と共に、攻撃性を再所有する必要があるように思うのだ。

フロイトが提唱するように、抑圧された感情との向き合い方の古典的な公式として、抑圧感情を特定し、それと向き合い、自己と切り離すことなく再所有することが重要である。今回の話題で言えば、抑圧された攻撃性の存在を特定しないことやそれと向き合わないこと、そして攻撃性と自己を切り離すような事態に陥った場合、抑圧された攻撃性は思わぬところで暴れ出してしまうだろう。

そうならないためにも、上記の古典的な原則に従って、自己の攻撃性を再所有するところまで実践を推し進めていくことが大切になるのではないだろうか。しかし、最も望ましいのは、こうしたワークよりも、例えば、武道を行うのでも良いし、激しい運動をするのでも良いし、攻撃性を文章や絵で表現するというように、実際に攻撃性を健全な形で自己表現することだと思うのだ。

私の場合、日頃の身体鍛錬の実践の中で攻撃性を放出するようなことを意図的に行っているし、文章の中で攻撃性を表現することもあるし、夢を通じて攻撃性を発散させている気がするのである。

282. オランダのIKEA

ここ二日間、朝夕がとても寒い。昨日の最高気温は17℃であり、最低気温は7℃であった。本日も似た様な気温である。

本日、日本にいる知人の方から暑中見舞いをいただいたのだが、「寒中見舞い」という言葉の方がふさわしいのではないかと思わせる気候である。念のため、フローニンゲンの年間気温を確かめたところ、やはり八月が最も気温が高い月であるということがわかったが、この気候は夏とは思えない。

私が二年半ほど過ごしたサンフランシスコも夏は非常に涼しく、気温はフローニンゲンと似た様なものだが、サンフランシスコの夏においては半袖で過ごしていたと記憶している。しかし、ここフローニンゲンでは、暑がりの私でさえ、長袖を着用して日中外出している有様である。

気温が似通っていても体感温度が異なるというのは興味深い。フローニンゲンの夏の気候がどのようなものであり、それを自分はどの様に感じて受け止めているのかを徐々に掴み始めている。

イギリスの様に断続的に降る雨にも慣れてきたところで、昨日はIKEAに行ってきた。今回の新居も家具付きのマンションであるから、それほど必要品はないのであるが、備え付けの枕とベットカバーに満足していなかったため、それらを好みのものに変えようと思ったのだ。

IKEAに行くのは日米での生活を振り返ってみても、今回が初めてであることに気づいた。運動がてら片道40分ほど歩いて目的のIKEAに到着した。

到着してみて驚いたのは、広大な敷地の上にIKEAが存在しており、店内のスペースも想像以上に広がったことである。子供のための遊び場やカフェやレストランも同じ建物の中に入っており、このように充実した設備だと確かに週末に家族で訪れるのも理解できる。

日本からオランダに輸送した荷物のほとんどは、研究に必要な書籍や論文類であり、不要な日用品はできる限り処分していたため、バスタオルがもう一枚必要だとふと思った。浴室類のコーナーに到着し、バスタオルらしきものを発見した。

それらのバスタオルを全てチェックしてみたところ、何かが違うと思った…。広げたバスタオルを丁寧に折りたたみ、静かに元の位置に戻した。そして自分の身体のサイズを考えた場合、バスタオルではなく、こちらで言う「ハンドタオル」で十分だと思い、中ぐらいのハンドタオルをバスタオルとして使おうと思って一枚ほど購入した—言う必要もないと思うが、オランダ人の手の大きさが私の身体の大きさと等しいわけではない。

オランダ人男性の平均身長は182cm、女性の平均身長は170cmぐらいであるが、それはあくまで平均であり、190cmを越す男性や185cmを越す女性がゴロゴロいる。自分の心の動きを観察してみると、平均身長あたりに分布するオランダ人の男性や女性には親近感を覚えるが、190cmを越す男性や185cmを越す女性に対しては圧倒されるものを心の中で感じてしまう。

毎日スーパーや街で、必ずと言っていいほど190cmを越す男性や185cmを越す女性を見かけるので、このあたりも慣れてくるのだろうか。そうした事情もあり、認知バイアスが生じて、オランダのIKEAで置かれているものは、米国や日本のIKEAで置かれているものよりも格段にサイズが大きいのではないかと思ってしまう。先ほどのバスタオルの件がまさにそうだ。

だが、お目当ての低反発枕とベッドカバーは理想のサイズで購入することができ、こちらの常識の範囲内に収まるサイズのバスマットも合わせて購入した。もうしばらく時間をかけて、これまで培ってきた諸々の感覚を一旦リセットし、新たな感覚を構築していくという作業が続きそうである。

283. 環境適応とシステムの発達

米国在住の最後の拠点であったロサンゼルス時代から、昨年 of 東京滞在期間において、“dynamic system”や“systems theory”という単語が挿入されている専門書の中で、優れたものは大半購入したように思う。

昨日から本日にかけて目を通していたのは、“Ecological Psychology in Context: James Gibson, Roger Barker, and the Legacy of William James’s Radical Empiricism (2001)”という書籍である。米国プログマティズムの始祖であり、かつ米国の心理学を切り開いたウィリアム・ジェイムズ(1842–1910)や、「アフォーダンス」の概念で有名なジェイムズ・ギブソン(1904–1979)はかなり人口に膾炙した存在だと思うが、ロジャー・バーカー(Roger Barker: 1903–1990)という心理学者を本書を通じて初めて知った。

本書を読み進めていると、ジェイムズ・ギブソンとロジャー・バーカーのどちらも、人間と環境を分離するのではなく、両者の相互作用によって人間の認知や行動が決定されるという考え方を採用していたことがわかる。この考え方は、まさしく元ハーバード大学教育大学院教授カート・フィッシャーのダイナミックス理論の中で展開されている考え方で親和性が高い。

ギブソンが師事していたのはエドウィン・ホルト(Edwin Hold: 1873-1946)という心理学者で、ホルト自身はウィリアム・ジェイムズに師事しており、ギブソンの生態心理学(ecological psychology)はジェイムズの“radical empiricism(根本的経験論)”や“functional psychology(機能心理学)”の影響を多大に受けていることがわかった。

一方、ロジャー・バーカーは、ダイナミックフィールド理論で有名なカート・レヴィン(1890-1947)に師事し、レヴィンからの影響を受けながら環境心理学(environmental psychology)という領域を打ち立てた。レヴィンは、ゲシュタルト心理学を創設したカート・コフカ(Kurt Koffka: 1886-1941)から影響を受けており、そのレヴィンはバーカーを指導していたという事実と、ギブソン自身も大学で教鞭をとるようになってからコフカのゲシュタルト心理学に間接的にはあるが多大な影響を受けていたということがわかった。

こうした共通事情があったため、ギブソンとバーカーの思想には重なる部分が多々あるのだと思った。両者の思想において決定的に異なる箇所も存在すると思うが、現段階では両者の学説に深く踏み込んでいないので、細部の違いについてはわからないが、とりあえず両者は相通じる発達思想を持ち、それはカート・フィッシャーの発達理論にもつながるものがある、という発見を得た。

本書を読み進めながら、私たちの知性や能力を自力で育んでいくことにはつくづく限界があるということを改めて強く実感させられた。ギブソンの生態心理学的にも、バーカーの環境心理学的にも、私たちの知性や能力は環境に埋め込まれているという特質上、そして環境との相互作用によって知性や能力が発揮されるという特質上、環境を無視して自力で知性や能力を高めることはほぼ不可能だという考え方に至っている。

フローニンゲンの街中を歩きながらふと思ったが、日本や米国での生活を通じて構築した認知システムを一度も通過したことのないような新たな情報が、オランダという自分にとっては未知なる生活空間から投げかけられているのを日々感じるのだ。

もちろん、既存の認知システムで処理できる情報も多々あるが、それでもなお、一旦立ち止まらざるを得ないような新種の情報が環境からフィードバックされてくるのをありありと感じるのである。

渡欧直前に、東京でお世話になったマンスリー・マンションの管理人さんから、「まずは向こうの水に慣れてくださいね」という言葉をかけていただいたが、まさにこれまでとは違った水を体内に取り入れ、体内システムがそれに順応していくように、徐々に自分の身体システムを作り変えていく必要があるだろう。

これは身体システムのみならず、心理システムにも当てはまる。思うに、心理システムは、環境に適応する形で作り変え作業が発生し、システム自身の変貌を遂げることによって進化していくのだと考えている。

つまり、知性や能力というシステムは、既存のシステム構造では処理しきれない新しい情報を未知なる環境から投げかけられることによって、構造自体を作り変えていく流れが生まれるのだと思う。この10年間で物理的な生活拠点を散々変更してきた挙句に実感することは、「人間＝環境」と言ってもいいのではないか、というぐらいに、私たちの知性と環境は密接不可分に結びついているのだ。

そうしたことを考えると、人間が人間自身を変えようとすることは至難の技なのではないかと思わされる。要するに、環境からのフィードバックの種類と質を変えることなしに、私たちが自分の知性や能力だけに手を加えようとしても、知性や能力の発達はほとんど生じず、その努力は徒労に終わるのではないかということだ。

後一ヶ月ほどで大学院のプログラムが開始されるが、それを待つことなく、日々のこうした平穏な生活の中でも、環境からどのような種類と質のフィードバックが自己に投げかけられ、そして自分はそれをどのように受け止め消化しているのかをより明瞭に感知できるように、より一層自分の感覚を研ぎ澄ませる必要があると思っている。

284. 生活リズムの創出

日本でいう十月中旬の気候に該当するのではないかと思われるぐらい、フローニンゲンの八月の気候は涼しい。今朝は晴天に恵まれ、近くの公園にランニングをしに行った。何を隠そう、この緑豊かな公園が近くにあるからこそ、今回の新居を選んだようなものなのだ。

ランニングの前に、家庭ゴミを指定のゴミ捨て場に持って行こうとした。すると、ゴミ箱には「Start」ボタンと、何やらカードをかざす箇所があることに気づいた。

「これは一体何のカードをかざせばいいのだろうか？ゴミを捨てるために特殊なカードを購入する必要があるのだろうか？」などと右往左往しながら、カードが無いと開かないことを承知で、ゴミ箱のドアを強引に開けようとしてみた。しかし、当然ながらビクともしない。

そういえば、フローニンゲン到着の深夜に、ヨスが何やらゴミの捨て方について二、三のセンテンスで説明してくれていたのを思い出した。だが、あの時の私の頭は朦朧としており、ヨスの話を真剣に聞くゆとりなど毛頭なかったのだ。

結局捨てることのできなかったゴミを片手に、とぼとぼと部屋にゴミを持ち帰ろうとした時、隣の棟の一階の住人がマウンテンバイクと共に偶然現れたのだ。今日は晴天であるから、サイクリングにでも出かけるところだったのだろう。

年配のこの男性に質問をしてみようと思い、すかさず自己紹介をすると、非常に親切にゴミの捨て方について教えてくれた。

私:「すいません、ここではゴミをどのように捨てればいいのかですか？」

年配の男性:「ああ、カードが必要なんだよ。ちょっと待ってなさい。今、どんなカードか見せてあげるから。」

私:「ありがとうございます。」

年配の男性:「これだよ、これ。市役所で住民登録したらもらえるよ。」

私:「ああ、住民カード(residence permit card)ですね。つい先日登録を済ませたばかりで、郵送されてくるまでに2週間ぐらいかかるそうなんです。」

年配の男性:「そうかあ、それは不便だろうから、一緒について来なさい。ゴミの捨て方と共にそのゴミを捨ててあげよう。」

私:「どうもありがとうございます！」

その方は大変親切なオランダ人で、奥さんと共に隣の棟の一階に住んでいるようだ。ゴミ捨て場に到着して、ゴミの分別などについてあれこれ質問をしたところ、日本に比べて、非常に大雑把なゴミの捨て方であることに気づいた。

日本のすべての地域がどうなっているのかわからないが、私がこれまで住んでいた日本の地域では、基本的に燃えるゴミと燃えないゴミを分ける必要があった。しかし、ここフローニンゲンでは、燃えるゴミと燃えないゴミを分ける必要はなく、一緒のゴミ袋に入れて捨てていいのだそうだ。

一応、確認のために具体例を用いながら質問を試みた。

私:「ということは、あそこに落ちているペットボトルとバナナの皮を区別して捨てる必要はないということですか？」

年配の男性:「そうだよ。その必要は全くないね。ただし、ガラスはダメだ。ガラスはあっちにあるコンテナーの中に捨てなければいけないんだよ。あと、古紙類は月に二回ほど回収に来るから、その日に合わせて棟の外に置いておく必要があるんだ。」

私:「なるほど～、了解しました。いや～、本当に助かりました。どうもありがとうございます。」

年配の男性:「いえいえ、どういたしまして。それでは良い一日を！」

私はその年配の男性に感謝をし、住民カードが届くまであと一週間以上あるため、生ゴミを腐らせないように凍らせてしばらく凌ごうと思った。そういえば、これはサンフランシスコ時代のルームメイトだったスコットから教えてもらった生活の知恵だった。そんなことを思いながら、心待ちにしていたランニングに出かけた。

静かな公園を走りながら、観想的な生活リズムに入ったことを知る。

【追記】:後日すぐに判明したが、ゴミを捨てるためのカードは住民カードではなく、そのアパートの各棟に備え付けられている共通のカードであった。

この瞬間において偶然だと思っていることが果たして本当に偶然なのかどうかを考えている。というのも、そうしたことを考えざるをえないぐらい、昨年以降、実に不思議な偶然が多発しているのだ。

先ほど湯船に浸かりながら、自らの個別的な体験と徹底的に向き合うことによって、普遍的な何かを掴んでいく必要があると改めて思っていたところ、この態度こそまさに、私が森有正先生に対して最大の共感を抱いた点なのだという事に気づかされた。

森先生は、ご自身の体験を思索の糧にし、それらと不断に向き合うことによって、普遍的な思想を打ち立てていった。より正確には、個的な体験というよりも、森先生という一人の人間でしか触れることのできない固有の純粹経験を出発点とし、そこから思想を紡ぎ出して行っただの。

森先生の思索に対するこうした態度が発火材料となり、森先生のイメージからウィリアム・ジェイムズのイメージが湧き上がってきた。ウィリアム・ジェイムズも、哲学思想の原点を純粹経験に求め、それと真摯に向き合うことによって、独自の哲学体系を打ち立てたと言っても過言ではないだろう。

900ページを越す大著だが、ウィリアム・ジェイムズの主要論文が収められた“The Writings of William James: A Comprehensive Edition, Including an Annotated Bibliography Updated Through 1977”を読んだ時に、上記のようなことを思ったのを思い出した。

とりわけジェイムズが、既存の言葉や概念で言い表せないものを、自分の言葉や概念によって捉えようとしていく姿勢に森先生と同じものを見出したのだ。ジェイムズも森先生も、個的純粹経験に光を当て、それを言葉や概念で捕まえようとする不断の試みを通じて、己の思想体系を構築していったのだ。

そこで思い出したのが、上述のジェイムズの書籍と同時期に購入した、西田喜多郎先生の『思索と体験』という本である。西田先生はまさに、ご自身の座禅の実践をもとに純粹経験を自覚することによって思索を深めていった哲学者である。

オランダに持ってくる和書を絞りに絞った結果、西田先生の書籍を他にもあれこれと購入したにもかかわらず、この一冊だけを偶然ながら持って来ることにしていたのだ。これは大きな偶然だと思う。

もう一度話を戻すと、もちろん森先生はデカルトやパスカルの研究で偉大な功績を残しているし、ジェイムズにせよ過去の心理学者や哲学者の業績の上に偉大な功績を築いていったと言える。だが、西田先生と同様に、彼らは二人とも、単純に過去の学説を整理するような文献学者では決してなかったし、過去の哲学者の思想を単に追いかけるだけの哲学学者でも決してなかったのだ。

彼らは各人固有の純粋経験を逃すことなく、それを思索の第一の糧とし、独創的かつ普遍的な思想にまで思索を深めていったのだと思う。そのようなことを考えながら、私自身も自己の純粋経験から探究を出発させる必要があると強く思った。

286. 次なる発達段階への道:システム構築の手法について

今日の天気予報は終日晴れとのことであったが、一日の途中で何度かまばらな雨が降った。日々の仕事の息抜きに書斎の窓から空を観察している。

日本において、確実に雨が降らない空というのは感覚的にわかるのであるが、ここオランダにおいてはその感覚がことごとく裏切られている。フローニンゲンの年間雨量は東京の年間雨量の半分ぐらいだが、ほぼ毎日どこかのタイミングで雨が降っている気がする。

そのため、外出の際には折り畳み傘を必ず携帯する必要がある。天候というのは動的システムの典型例であり、その挙動を正確に掴むのは実に難しいと痛感する毎日である。

空を見ただけでは天候のパターンがなかなか掴めないため、流れ行く雲の観察データを集め、雨を降らせる雲の色と形状のパターンをおおよそ理解し始めた。いやはや、天候という動的システムの挙動や特性もさることながら、雲というシステム一つをとってみても、その挙動や特性は実に多彩で見ていて飽きないのが不思議である。

そのようなことを思いながら、先日近所の古書店で購入した“Cognitive systematization (1979)”を読むことによって考えさせられたことを思い出す。これは実証研究に基づいた構造的発達心理学における発見事項であるが、私たちの知性や能力は絶えず「システム化(体系化)」されながら発達していくのだ。

言い換えると、私たちの知性や能力の発達とは、一つのシステムを作っていくプロセスに他ならないのだ。これはいかなる知性領域・能力領域においても当てはまる。

例えば、ピアニストに関して言えば、ピアノ演奏能力を向上させるためには、楽曲の理解や指の動かし方などの多様な構成要素を一つの大きなシステムとして構築する必要がある。またスポーツ選手に関しても同様であり、従事するスポーツに要求される能力を高度化するためには、多様な動作を一つのまとまりとして発揮できるようにシステム化する必要があるのだ。

さらに、学者においても、自分の専門領域の多様な知識を構成要素と見立て、それを材料にして一つのシステムを構築していくことが、その人にとっての思想や理論体系となるのだ。

上記のような例を見ていくと、自然界にせよ人間界にせよ、至る所でシステムが形成されていることに気づかされる。

とりわけ、言語に依存する度合いの強い知性領域・能力領域の場合、システム化を促す実践として、私はやはり「書くこと」の効用には計り知れないものがある、と日々強く実感している。どうして文章を書くという実践がシステム化に最適なのかを少し考えてみた。

そもそも何か文章を書くためには、文章の材料が必要となる。別の表現をすると、文章という一つのシステムを構築するためには、それを構成するためのサブシステムとなる知識や経験が必要になる、ということだ。

興味深いもので、私の場合、ちょっとしたメモを書こうと思うと、当初予定していたものとは全く違う知識や経験が私の中から自発的に湧き上がってきて、それを組み合わせようとするような運動が自然に開始されるのだ。

より自分の感覚に正直になると、私が意図的にそれらの材料を一つの文章としてまとめあげようとするというよりも、それらの材料が自発的に一つの文章というシステムに変化したがっているような動きを見せるのだ。

これはおそらく、知識や経験というのは誰にとっても膨大な数に及び、混沌とした状態で私たちの中に存在しており、文書を書こうという意図が発動した瞬間に、勝手に秩序を形成する方向へ動き出すからなのかもしれないと思った。言い換えると、私たちの知識や経験は混沌とした状態で存在しているが、それらは本質的に秩序を求めるという性質を持っているようなのである（下記、「編集後記」で修正）。

文章を書くというのは、自分の考えを立ち止まってまとめることを要求してくるため、密度の濃い秩序化が生じやすいのではないかと考えている。上述のように、自分の意図を超えたところで秩序を生み出す働きかけが存在しており、それに加えて自ら意図的に文章の形としてまとめるという秩序化作業を行えば、二重の意味で秩序化が起こるのだ。

システムの形成過程で面白いのは、システムが形成される時に、これまでとは質的に異なったシステムを形成する方向に動くのか、これまでと同じ質を持ったシステムを形成する方向に動くのか、という二つの道があることである。

簡単に述べると、前者は次の段階への発達を意味し、後者は現状維持を意味する。上記の二重の秩序化のうち、構成要素が内在的に持つ純粋な秩序化の動きに身を委ねているだけだと、現状維持の状態に陥ってしまう可能性が極めて高いと思う。

一方、自分の意志を持って文章の形にまとめるという意図的な秩序化が介入して初めて、次の段階へのシステム形成に動き出す可能性が開かれると考えている。逆に述べると、文章の形にまとめるという実践が欠如している場合、質的に異なる新たなシステム形成の道が閉ざされる可能性が相当高まってしまえるだろう。

文章を書くという実践は、誰にでも実行可能なシステム形成のための実践だと思うのだ。私自身も日々文章を書くということを日課にし、その効用について今後も観察と考察を続けていきたい。

【編集後記】:後日改めてこの点について考えてみると、知識や経験を獲得するプロセスは混沌としているが、知識や経験が自分の中に真に血肉化されるときには秩序化された形でそれらが格納されるのではないかと考えを思い改めた。そのため、私たちの内側にある知識や経験は混沌とした状態で存在していると言うよりも、秩序化された状態で存在しているのではないだろうか。というのも、構造的発達心理学でいう知性や能力の発達は、「システム化」であることを冒頭で指摘しているように、システム化によって私たちの知識や経験はあるまとまりを持った安定した状態を生み出しているからである。そして、複雑混沌とした外部環境を生きる中で、過去の知識や経験を外部環境へ適用しようとした瞬間に、秩序化されていた知識や経験は私たちの内側に混沌状態を生み出し、そこで体験を文章として表現しようとする、新たな秩序化が起こるのではないかと思う。知識や経験は混沌とした状態で存在しているのではなく、秩序化された状態で存在しているという修正を加えたが、結局のところ、上記で書いたように、私たちの知識と経験は秩序を求めるといふ本質的な性質には変わりがないと考えている。

287.動的な運動を生み出すバランスボールの効用

ある時から椅子に座るのをやめて、バランスボールに座るようになってから、作業効率や集中力などが格段に向上したように思う。何よりバランスボールのおかげで、心身の調子がより良いものに変化しているのを感じている。

オランダへの引越しの際に、これまで七年間ほど使っていたバランスボールを処分せざるをえなくなり、フローニンゲンでの新居に到着後、新しいバランスボールを購入しようと考えていた。日本であれば、アマゾンで注文すれば事足りるところだが、オランダではそうもいかない。

というのも、オランダのアマゾンは品揃えがお世辞にも良くはないのだ。これは相当控え目な評価であり、実際にはオランダのアマゾンにはなんと書籍しかなく、品揃えは相当悪いのだ。しかも、書籍に特化しているから書籍の品揃えがいいかというと、決してそうではない。

これまでの経験上、洋書の専門書の品揃えは圧倒的にアメリカのアマゾンが優れており、日本のアマゾンもなかなか品揃えがいいという印象を持つ。そして専門書に関しては、イギリスのアマゾンもそれなりに良い。

そうした事情により、オランダのアマゾンで書籍のみならず、バランスボールも購入できないという状況だったため、何とか“Atheleteshop”というスポーツ用品専用のオンラインショップでお目当のバランスボールを購入した。

バランスボールに座って長らく仕事をしてきたが、椅子に座って仕事をするのはやめたほうがいいのではないかと思わされる。普通の椅子に座ることは、姿勢が悪くなるということ以上に重大な問題をはらんでいる気がしている。

ジェイムズ・ギブソンのアフォーダンス理論が示唆するように、椅子というのはそもそも、「静かに座る」という情報を私たちにフィードバックしてくるのだ。

そのため、椅子に長く座って作業をするということは、長時間にわたって身体と精神を静的な状態にしてしまうことを意味するのではないだろうか。これは身体と精神にとって好ましくないだろう。というのも、私たちの身体と精神は本質的に動的なシステムだからである。つまり、私たちの身体と精神は絶えず動きながら変化していないと機能不全に陥ってしまうのだ。

その点、バランスボールは少し姿勢が動くたびに、それに応じてボールの位置が動き、それに合わせるために自らの身体ポジションを変化させなければならない。身体ポジションを変える際に、身体の内側の筋肉に注目してみると、実にカオス的なパターンで筋肉が刺激されているのが手に取るようにわかる。

私は毎日10時間以上バランスボールに座っているが、そのおかげで生産性が格段に向上している気がするのだ。特記事項としては、通常の椅子に座って書物を読んだり、文章を書いたりすることに比べて、ある種独特のリズム感が備わったように感じている。

バランスボールが生み出す独特かつ微細なリズムに合わせて書物を読んだり、文章を書いたりしていると、読書や執筆に動的な波がもたらされるのである。あとはそうしたダイナミックな波に身を委ねるだけで、自然と作業が進行していくのだ。

人間というダイナミックシステムは不思議なもので、静的なフィードバックを受けている状態では、挙動が静的なものになり、動的なフィードバックを受けている状態では、挙動が動的なものになる。

そうしたことを考えると、バランスボールは身体システムの動きをより動的に稼働させることに一役買ってくれるだろう。また、それが認知システムをより動的に稼働させることにつながるのではないかと感じている。新しいバランスボールの到着が待ち遠しい。

288. 卓越性の起源

関与と恩寵。それは世界からの多様な関与と恩寵の賜物なのだ。

今日の午前中は、ここ三日間読み続けている「タレントディベロップメントと創造性」というコースで課題文献とされている“The complexity of greatness: Beyond talent or practice (2013)”の続きを読んでいた。相変わらずオックスフォード大学出版の書籍は、ケンブリッジ大学出版と同様に良書が多いと思わされた。

私が在籍するプログラムを統括しているルート・ハータイ先生——ハータイ先生は私よりも一つ年上なだけであり、二人の間柄は親密であるため、以下「ルート」——に事前にメールで連絡をし、私が履修する予定のコースに関する情報を得て、日本にいる時にとりあえず全ての課題図書を手に入しておこうと思った。

これはジョン・エフ・ケネディ大学に在学していた時にも実践していたのであるが、学期が始まってから課題図書を読むというのでは遅いのである。学期が始まる前に、全ての課題図書を少なくとも一回か二回は目を通しておかねば、授業の進行と課題をこなすことに追われてしまい、提供される学習マテリアルを自分の中で十分に深めていくことができない、という考えに至った。

また、米国の大学院では筆記試験を実施するところは少なく、一般的に学期末にレポートを提出することが要求されるのだ。ジョン・エフ・ケネディ大学も状況は同じであり、ほぼ全てのコースで学期末にレポートが課されていた。この時にも工夫したのは、学期末になってからレポートを執筆し始めるのではなく、クラスが開始された初日から学期末レポートを執筆し始めるということである。

最初のガイダンスのクラスが終了したらすぐに、どのようなテーマを設定し、どのような内容のレポートを書くかの大枠を決定するのである。課題図書をクラス開始前に読み込むということ、学期末レポー

トの構想を早い段階で練り、実際の執筆を少しずつ進めていくことによって、精神的な余裕を持ちながらクラスの内容を深めていくことができると思う。

上記の書籍は、ルートが担当する「タレントディベロップメントと創造性」というクラスの課題図書であり、このクラスはプログラムの最初の学期にあるため、今の時期に何回か読んでおこうと思ったのだ。

本書は、「卓越さの起源はどこにあるのか？」という問いを中心に、音楽・芸術・学術・スポーツなどの多様な領域において、高度に発達した知性や能力が育まれる要因やプロセスについて詳細に言及している。才能に関する科学研究は数多く存在し、その分、議論が紛糾するトピックも多いと言える。

これまでの研究では、卓越性の起源を才能や環境という二つの要因のどちらか一方や、折衷的に両者に帰することが多かった。しかし、近年の卓越性の研究結果が示しているように、高度に発達した知性や能力が育まれる要因やプロセスは実に複雑なのである。

重要なのは、「氏か育ちか」という単純な切り分け方の発想をするのではなく、「育ちを通じた氏」という発想をするということ、より厳密には、「複雑性を不可避に内包した育ちを通じた氏」という発想を持って、卓越性が育まれる要因やプロセスに迫っていく必要があるのだ。

議論を分かりやすくするために、仮に資質と環境という二つの要因に絞ると、近年の卓越性研究やタレントディベロップメントの研究は、どちらかという環境要因が持つ複雑性の解明に焦点を当てている印象がある。

本書に掲載されている数多くの論文を見ても、確かに資質的なものによって知性や能力の発達が左右されるという側面はあるものの、後天的に経験される複雑な環境要因の方が知性や能力の発達の決め手になっているという印象を持つ。

結局のところ、いくら優れた資質を持っていても、私たちの知性や能力は文脈や環境に依存したものであるという性質を持っているため、特定の文脈や環境において実践を積み重ねなければ、持って生まれた優れた才能も開花しないのだ。

そしてよく言われるように、熟慮の伴わない実践をいくら積み重ねたとしても、卓越性に至ることはない、という点を再認識することが重要だろう。また、「特定の文脈や環境において、熟慮を伴った実践を積み重ねれば卓越性に到達するのか？」と問われると、一概にそうだとは言えない。

これは見過ごされがちな点であるが、特定の文脈や環境において熟慮を伴った実践を継続的に積んでいくというのは、簡単に成し遂げられることではないのである。そうした実践を長きにわたって継続させていくためには、「支援的な社会ネットワーク」が不可欠なのだ。

ルートの博士論文を読んでいて面白いと思ったのは、才能を開花させるために必要な社会ネットワークの特質を、応用数学のグラフ理論に端を発する「ネットワーク分析」の手法を用いて解析していることだ。ルートの論文の結果からわかることは、優れた知性や能力を発揮している人物の周りには必ず、多様な支援的ネットワークが密に構築されているのである。

ルートのネットワーク分析を見ながら思い出したのは、ロシアの発達心理学者レフ・ヴィゴツキーだ。ヴィゴツキーが構成主義的発達心理学に果たした一つの大きな貢献は、個人と社会的な文脈の相互作用を強調したことにあった。つまり、私たちは自己と他者の関係性が織り成す網の目の中で学び、そして発達するということを、ヴィゴツキーはいち早く見抜いていたのだ。

ルートの研究やヴィゴツキーの功績に思いを巡らせながら、優れた知性や能力を持つ人に対して私が敬意を表する理由を探っていた。私は何も彼らの知性や能力そのものに敬意を払っているわけではない。むしろ、そうした優れた知性や能力というものが、当人の絶え間ない鍛錬と共に、多様な人たちの支えや関与によって生み出された賜物だ、という点において彼らの卓越性に最大限の敬意を払うのである。

ある人物の卓越性がこの世界で開花するという現象は、いわば、世界からの多様な関与と恩寵によって顕現した産物だと見ることはできないだろうか。リオで開催されているオリンピックについて思いを馳せると、そのようなことを考えざるをえなかったのだ。

—70歳以前に描いたものは全く取るに足らないものであった。73歳で鳥や獣、魚の骨格のなんたるかをいくらかは悟ることができた。このまま修行を続けていれば、100歳で神妙の域に達することができるだろう。110歳まで続けていれば、一点一画が生きているもののように描けるようになるはずだ—
葛飾北斎

果てしなく続く悠久の時の中で、自らの生きる時間の有限さと短さにこの頃よく思い留まらされる。たいていの場合、こうした時間に関する問題に自己を投げ入れようとすると、その瞬刻に通常とは異なる意識状態に参入し、自分の小さな自我が一時的に緩和する。

時の問題に自己をどれだけ深く投げ入れるかによって、私の小さな自我の諸機能が単純に緩和されるだけなのか、はたまた自我が消滅し、自己の広大なスペースが開けてくるのかが決まるのだ。夕暮れ時にこの種の問題に突き当たってしまうと、ほとんどの場合、自我が一時的に消滅し、日常の社会生活の中で自分が自分だと思っている存在はいなくなる。

昨日から今日にかけて、“Handbook of adult development and learning (2006)”という書籍に目を通していた。オックスフォード大学出版の“Handbook”シリーズは優れたものが非常に多く、本書も成人発達と成人学習について網羅的に質の高い研究論文を掲載している。

現在の私が探究を進めていきたいフィールドは、一般システム理論、社会システム理論、オートポイエーシス理論、ダイナミックシステム理論などの複雑性科学を構成する諸理論であるが、本書を読むことによって、ここでもう一度成人発達理論について知識の確認をしたいと思ったのだ。

本書を読み進めながら、発達現象を深く理解するためには、時間という概念に対する考察を深めていくことが不可欠だと改めて思う。冒頭の葛飾北斎の言葉しかり、年齢を基準としたエリク・エリクソンの発達モデルにおいても、時の概念がそこに必ず入り込んでくるのだ。

冒頭の引用は、葛飾北斎が70歳を過ぎて『富嶽三十六景』を完成させた時に残した言葉である。彼が残した言葉とエリクソンの発達理論を参考にして、年齢を基準にした発達モデルを自分なりに

想定すると、30歳までは「乳児期」、30歳から40歳は「幼児期」、40歳から50歳は「少年・少女期」、50歳から60歳は「青年期」に当たるのではないかとつくづく思われる。

もちろんこれは自分の仕事の性質と照らし合わせて私が主観的に感じていることではあるが、いずれにせよ、30歳から60歳までは一貫して自分の人生における「準備期」に過ぎないのではないかと思う。そして、60歳から90歳までが、ようやく自分の仕事が少しずつ形になり始める「活動期」であり、私にとって最後の90歳から111歳までが、決して完成することのない自分の仕事を完成に向けて靈魂を吹き込むような「熟成期」と位置付けている。

このようなことを考えてみると、自分の人生は短くもあり、長くもあると感じる。どちらにせよ、人間の一生は有限であるということに変わりはなく、「熟成期」と私が呼ぶ時期にどのように自らの仕事に取り組むかによって、悠久の時に足を踏み入れることができるかどうかが決まってしまう、というところにポイントがある気がする。

つまり、晩年の時期に、どのような姿勢でどのように己の仕事に打ち込むかによって、自己という存在が久遠の時と邂逅合一できるかが決定されてしまうと思うのだ。より正確には、有限かつ一瞬の自己が無限かつ永遠の自己に帰還するかどうかは、そもそも熟成期に向かうもっと前の段階、今の私が属する乳児期からどのように毎日を過ごすかにかかっていると思うのだ。

個人に属する仕事を極めていったその先に、その仕事は普遍的な性質を帯び、普遍性を獲得したことによってそれが永遠なる時間世界の中に組み込まれていくのだ。自分の仕事が永遠なるものに変貌するためには、乳児期に該当する今の私にとって、準備期間において辛抱強く全身全霊をかけて己の仕事に励み続けることが何より重要なのだ、と自分に言い聞かせた。

父が還暦を迎えるに際して、そのようなことを考えさせられた。父の希望もあって、還暦記念として、父が生まれた西暦1956年に作られた「アルマニャック・ラフォンタン」というブランデーを贈呈することにした。

ブランデーの歴史を調べてみると、もともとブランデーは中世時代に流行していた錬金術の恩恵を受けて生まれたものらしく、「生命の水」という意味が元来備わっており、不老長寿の薬として飲まれていたらしい。この意味は贈呈用にしたメッセージと合致して嬉しく思う。

人生は還暦から始まる。そんなことを強く思ったフローニンゲンの夕暮れ時であった。

290. 欧州小旅行計画

今日は先ほど、久しぶりに天気雨に見舞われた。空は晴れているのに雨が降るというのは不思議だな、と思っていた幼少時代のある記憶が鮮明に蘇ってきた。この記憶を再想起したことはおそらく初めてだったので、オランダのこの予測のつかない天候に対してある意味感謝をした。

上空を移動する雲の動きとズレる形で雨滴が地面に降り注いだのだろうか。それとも、少し離れたところにある雨雲が雨を降らせ、それが風に運ばれて今私の目の前に送り届けられたのだろうか。いずれにせよ、私の認識世界に新たな意味をもたらしたこの天気雨に対して、地上の恵みだと感じたことに変わりはない。

天気雨の姿を思いながら、移動する雲とは異なり、あまり移動することをしない自分に想いを巡らせていた。具体的には、旅好きではない自分についてあれこれ考えていたのだ。

ある場所にそこにしかないものが存在し、そしてそれは自分が本当に見たいものや体感したいものなのかどうかを吟味し、自分の要求に合致するものがなければ旅へ出かけようという重い腰が上がらない、という特徴を自分は持っているのだと思う。

旅に関して私はそうした特徴を持っているが、この夏は欧州小旅行を計画している。というのも、ヨーロッパにはそこにしかないものが数多く存在していることに気づき、そしてそれらは自分が本当に見たいものや体感したいものだったからだ。

今、フローニンゲンから東に向かって楕円形を描くような小旅行を計画している。具体的には、フローニンゲン(オランダ)→ライプチヒ(ドイツ)→シュツットガルト(ドイツ)→ニューシャテル(スイス)→パリ(フランス)→フローニンゲン、という順番で旅を行う予定である。

今回の欧州小旅行では、飛行機ではなく、電車を利用しようと思っている。その理由は幾つかあるが、一つには、ある地点から次の目的地に行くまでの地理的変化のグラデーションをじっくりと体感したいから、というものがある。

変化のグラデーションに関して思うのは、ある発達段階と次の発達段階のみに着目するような既存の構造的発達心理学の探究姿勢はもう十分なのだ。この考え方は旅に対する姿勢にも現れ、ある目的地と次の目的地だけをぶつ切りにして味わうような旅に意味も価値も見出せない自分がいるのだ。

ある発達段階と次の発達段階の間に起こっている多様なドラマを探究したいと思って、私はフローニンゲン大学に来たのだ。そうした考えを持つ自分が、自らの生活において、飛行機を用いて地理的变化の過程を飛ばすことはできないし、地理的变化が自らの内的変化に及ぼす影響過程を見過ごすわけにはいかないのだ。

欧州では格安航空会社が凌ぎを削り、航空券の費用が安いのは知っている。しかし、それでもそちらを選んではならないのだ。電車の車窓から見える景色の変化と共に、自分が何を思い、何を感じるのか、そしてどのような微細な変化が内側で生じるのかを観察したい。そのような思いから、今回の旅は全て電車で各国を回ることにした。

一拠点に比較的長く滞在して現地の人たちと同じような生活をするというのが通常の私の旅の仕方だが、今回は本当に小旅行という名前がふさわしく、各地に滞在できる日数はごくわずかである。

ごくわずかな滞在日数の中、「ここだけはどうしても訪れたい」という具体的な場所を記載しておきたい。

まずは、ライプチヒであるが、この都市は何と言っても音楽の街だ。敬愛するヨハン・セバスティアン・バッハを筆頭に、フェリックス・メンデルスゾーン、ロベルト・シューマンとクララ・シューマンなどのドイツを代表する音楽家が活動した街である。そのため、どうしても訪れたいのは、(1) バッハ博物館 (Bach-Museum Leipzig)、(2) バッハが長らく音楽監督を務めていたトーマス教会 (St. Thomas Church)、(3) メンデルスゾーン博物館 (Mendelssohn-Haus)、(4) シューマン博物館 (Schumann-Haus Leipzig) の四つである。

フローニンゲンを早朝に出発し、ライプチヒまで電車で八時間ほどゆっくりと時間をかけて移動したい。ライプチヒで二日間ほど滞在した後に、シュツットガルトへ向けて五時間ほどの電車の旅を行う。

シュツットガルトで訪れたい場所は一ヶ所しかなく、それはヘーゲル博物館 (Museum Hegel-Haus) である。

シュツットガルトではヘーゲル博物館だけを見たいので、宿泊は一泊を予定している。その後に向かう先が、待ちに待ったスイスのニューシャテルという街だ。実はこの街には何も無い。正確には、何か美術館や博物館などの目星の建物があるわけではない、ということである。ただし、ニューシャテルは自分にとって極めて重要な場所だと感じている。

なぜかという、風光明媚なこの街は、発達心理学の領域に多大な貢献を残したジャン・ピアジェの生誕地であり、彼が初期のキャリアにおいて生物学者として活動していた場所だからだ。つまり、私はニューシャテルという街を訪問することで、ピアジェが見ていたであろう景色を眺め、同じ空気を吸いたと思ったのだ。ただそれだけのためにスイスのニューシャテルという街へ行くのである。

ニューシャテルという街で、自分の中にピアジェを見出すことができれば幸いである。何も無いニューシャテルには二泊する予定であり、その後、パリへ向かう。

パリという街は、私を惹きつけるような強烈な何かがこれまで一切無かったのであるが、森有正先生 (1911-1976) と辻邦生先生 (1925-1999) との出会いによって、急速に関心を持つようになった場所である。とはいえ、パリで訪れたい場所というのもそれほど多くなく、必ず訪れたいのは、森先生が教鞭をとっていたパリ大学東洋語学校、辻邦生先生が住んでおられた旧邸宅、そしてノートルダム大聖堂の三箇所である。

パリにも二日間滞在する予定なので、時間があればルーブル美術館に足を運びたい。今回の欧州小旅行でどのような出会いと発見があるのか、静かな気持ちで大いに楽しみにしている。

291. 閉ざされた感覚を解放して

欧州小旅行が明日に控えているが、通常とほとんど何も変わらない日々である。今回の小旅行では荷物を最低限にし、身軽に動けるようにリックサックとトートバックだけを持っていく。

ヘーゲル博物館のあるシュツットガルトでは、ヘーゲルの主著“Phenomenology of Mind (2003)”を、ピアジェの生誕地であるニューシャテルでは、ピアジェの主要論文が収められた“The essential Piaget (1977)”を読みたいと思っていたが、それでは荷物が重たくなりすぎるので、今回は絞りに絞って、ケン・ウィルバーの“The simple feeling of being (2004): 邦訳『存在することのシンプルな感覚』”を持っていくことにした。

もちろんこの本だけを持っていくことにしたのはそれなりの理由があるのだが、「この書籍を今というこの時期に読み返さなければならない」というようなメッセージを受け取ったことが最大の理由だろう。ある意味で、この書籍以上に危険かつ洗練されたウィルバーの書籍を私は知らない。

ここ最近の私は特に意識状態の変化がダイナミックであり、日常生活を営む際に通常現れる意識状態とは質的に異なった状態に参入することが多くなっている。体験の種類と範囲は広く、様々なものがあるが、昨日の昼食後に起こった体験としては、目を閉じると、そこに千変万化する壮麗なイメージが無数に動いていることを知覚するというようなものだ。

通称「ヴィジョン」と呼ばれるようなこうした体験は、もはや私にとっては常態化してしまっており、気を抜いてしまうと、呼吸という本来奥深い実践の中に私たちが何も発見することができないのと同様に、重要な示唆を逃してしまうことになりがちである。

昨日の体験の最後に現れたイメージを幾分掴むことができ、それを記憶に保持するところまで成功した。それは、天上界につながるような白い階段をゆっくりと登っていく自分の姿であった。

こうした体験を振り返ってみると、どうやら現代社会で生きていく上では開く必要のない感覚が、人間の中に内在的に多数存在しているようなのだ。またそれと同時に、何かを生み出そうとする創造エネルギーのようなものが本来的に私たちに備わっているのだとも思う。

しかしながら、そうした感覚は現代社会を生きる上ではそれほど必要とされていないものであり——逆に危険視されたり、忌避される傾向の方が強いだろう——、新たなものを創出するような創造エネルギーというのも、残念ながら現代社会では抑圧の対象となっている。

振り返ってみると、米国での留学中は、それらの感覚を開く理論や方法、現代社会によって抑圧された創造エネルギーを回復する実践をひたすら求めていた自分がいたように思う。結果として、時間差はあるが、現代社会では抑圧の対象となる諸々の感覚や湧き出るエネルギーを徐々に解放している自己が自分の中に芽生え始めているのだと思う。

私の場合、開かれた感覚は基本的に暴走することはないのだが、エネルギーに関しては、火山が噴火するかのような感覚に陥ることが頻繁に起こる。通常は流動的なマグマのようにそのエネルギーは静かに力強く動きながら自分を絶えず支えてくれている、という印象がある。しかし、何かをきっかけとして、そのエネルギーが噴出することが度々あるのだ。

火山のような熱情的なエネルギーを制御しようとすることはもはや止め、その全てのエネルギーを現在は書物を読むことと文章を書くことに当てようとしている。つまり、そのようなエネルギーを健全な形でこの世界に現出させるために、絶えず読むことと絶えず書くことによって自分の日常を形作ろうとしているのだ。

そのような日常こそ、自分の解放された感覚と熱情的なエネルギーにとってみれば最善なのだと思う。

292. 反復と差異の混在する日々の中で

毎日呼吸をするのと同じように、文章を書くということを習慣づけて以来、一つの大きな疑問に直面していた。それは何かというと、毎日文章を書くという同一の実践をしているはずなのに、なぜ書く文章の中身が全く同一なものとなりえないのかが不思議だったのだ。

仮に以前執筆したものと同じようなテーマについて何か書こうと思ったとしても、文章に現れる語彙や文章の構成が完全に同一なものとなりえないことがとても面白く思った。日常がどんなに平凡に

思えても、どんなに繰り返しの多い日々にも思えたとしても、私たちの内側では常に昨日とは何か違う差異が芽生えているらしいのだ。

昨日の私と今日の私は、確かに自己の同一性が保たれているが、それでも微視的に自己を観察していると、多様な差異が自己の中で芽生えているのである。繰り返しの日々の中で差異が生じるという感覚を獲得した時、私は驚きのあまりしばらく啞然としていた。

私は我に返ると、毎日の自分の生活の中で、人目につかぬところで確かに生じている微細な差異を絶え間なく見届けることこそが、繰り返しとして流れる日々を深く尊重することになるのではないかと思ったのだ。そこからさらに、「反復」と「差異」という言葉の中には、今の私では掴むことのできないような大きな意味がまだ多分に隠されている、ということにも気づいたのだ。

これは以前の記事でも書いたが、昨年から特に不可思議な偶然が頻繁に身に起こるようになり、上記のような問題意識を持ちながら、未だ到着しない日本からの蔵書を待っている新居の本棚を眺めてみたところ、ある偶然に出くわしたのだ。本棚に置かれている数少ない書籍の中で、フランスの哲学者であるジル・ドゥルーズ(1925-1995)が執筆した“Difference and repetition (1994)”が目飛び込んできた。

なぜ私はこの哲学書を購入し、なぜこの書籍を自分の身と共に真っ先にオランダに持ってきたのか不思議ではなかった。この書籍の裏表紙と序章の最初のページしか読んでいないので、ドゥルーズが「差異」と「反復」にどのような意味を付与し、両者の関係性についてどのような思想を展開しているのかまだ定かではない。

しかしながら、序章の最初のページで、「反復は反復自身を生み出し、差異は差異自身を生み出す」というドゥルーズの指摘とは少しばかり違う感覚を私は持っており、この感覚の相違を確かめるかのように本書を読み進めていきたいと思ったのだ。

私が先ほど感じていたのは、反復の中に差異が宿り、差異の中に反復が宿るという類の感覚だった。言い換えると、反復に満ちた日常が自己の中で差異を創出し、新たな差異を獲得した自己が生活の中に反復性をもたらすという感覚に襲われたのだ。

つまり、反復と差異は別種のものでありながら、それは表裏一体の関係にあり、相互作用を生み出すような性質を持っているのではないかということだ。序章の最初のページから自分の主観的な感覚や考えを挿入しようとするのであるから、私はつくづく文献学者や哲学学者には向いていないのだと思わされる。

293. 共存在空間

九月からのプログラムが本格的に開始されるまで、あと三週間ぐらいの時間がある。今、幅広く自分の関心に合わせて様々な専門書を読んでいるが、今日は論文アドバイザーを務めてくださるサスキア・クネン先生の論文に目を通しておこうと思った。

クネン先生もカート・フィッシャーに劣らず、学術論文の執筆は多産である。現在、彼女の論文のほとんどはインド洋の貨物船の中だが、彼女の論文を二本だけスーツケースの中に入れてきたのだ。その論文が入ったクリアファイルは本棚に立てかけてあり、それを取ろうとしたら、クリアファイルが本棚と本棚の隙間に落ちてしまった。

それを取ろうとした瞬間、吉祥寺の社宅で生活していた三歳の頃、ダンスとダンスの間に足が挟まって抜けなくなった時の記憶が蘇ってきた。私たちはもしかすると、本棚と本棚の隙間に置かれているクリアファイルのような存在、あるいは、ダンスとダンスの間に挟まっている足のような存在なのかもしれないと思った。

これは米国在住時代の記憶であるが、サンフランシスコの街中を何気なく歩いていると、突然、狂人と常人の境目は無いに等しいのではないか、という考えが降ってきた。仮に今の自分が常人であるならば、いとも簡単に狂人に転がり落ち得るということがわかったのだ。

常に狂気と正気の狭間に立ちながら、私たちは今という瞬間を生きているのではないだろうか。両者の違いはほとんど無に等しく、わずかばかりの契機をもとにして、私たちは狂気にも正気にも満たされ得るということを感じてしまったのだ。両者の境界線上に自分は立っている、そんなことをサンフランシスコの街中で思い知らされた、という記憶が蘇ってきたのだ。

そしてこれは、生と死に関しても当てはまる。私たちは生と死の狭間に生きているのではないだろうか。極言すると、そもそも生も死も存在しないのではないかと思われ、その狭間が存在するだけなのではないかという気がしている。

この「狭間」というのは、実に曖昧な存在空間であるが、その空間は生と死のどちらも包摂しているということも言えそうだ。生と死の区別があることはわかっているが、そうした区別を超えたところにもう一つ違う何かが存在している気がするのだ。

左の本棚と右の本棚が異なり、それらの間に挟まれたクリアファイルが共に異なるものであることはわかっている。しかしながら、本来「挟まれている」という受動的なクリアファイルが本棚を能動的に「掴んでいる」かのごとく、左右の本棚をクリアファイルが含んでいるような感覚なのだ。

この感覚はわかりにくいかもしれないが、要するに、左右の本棚の間に隙間があるからこそ、二つの本棚が存在できているというような感覚なのだ。

このような感覚に従うと、私たちの眼前には、生と死がどちらも同時に共存在するような空間が広がっていると言えないだろうか。生があるから死があるわけでもなく、死があるから生があるわけでもなく、こうした共存在空間があるから生と死が共にあるというような、そんな認識世界が自分の中に開かれている感覚なのだ。

294. 組織のイノベーションについて: 創造性理論とシステム理論の観点より

この日は午前中にジル・ドゥルーズの“Difference and repetition”を読み、午後からミハイ・チクセントミハイ(1934-)の“The systems model of creativity: The collected works of Mihaly Csikszentmihalyi”を読んでいた。

チクセントミハイに対しては、「フロー」の概念に関する印象がとても強く、創造性に関してこのように優れた論文を多数執筆していたことを本書を通じて初めて知った。それにしても本書の出版社である「Spinger」は、専門書の中でもさらに専門的な内容に踏み込んだ良書を数多く出版している、という印象を改めて私に与えてくれた。

チクセントミハイはシステム理論の観点から創造性を研究しており、本書にはその研究成果が18本の優れた論文としてまとまっている。これはまた別の機会に詳しく紹介したいと思うが、創造性という現象が持つ多様な構成要素とその相互作用に着目し、また創造性というものが個人を取り巻く文化や環境との相互作用によって生み出されるという特徴を考慮して、システム理論の観点から創造性の創出プロセスとそのメカニズムにアプローチしている点が何より面白い。

私のメンターでもあり、所属プログラムのトップを務めるルート・ハータイは、ダイナミックシステム理論の観点から創造性の発達について研究をしている若き研究者であり、もしかするとチクセントミハイよりも面白い観点と方法論を持ってして創造性の研究に従事している可能性があるな、とふと思った。後日、ルートが一昨年に仕上げた博士論文と最新論文を改めてチェックしてみようと思う。

今回本書を読もうと思ったきっかけは、九月から始まるフローニンゲン大学のプログラムの中に「創造性発達と組織のイノベーション」と冠されたコースがあるからである。本書はコースの課題図書に挙がっているわけではないが、本書のタイトルにあるように、「systems model」と「creativity」という単語が決め手となって本書を読み進めていこうと思ったのだ。

読み進めてみると、創造性やイノベーションに関する研究と発達研究は非常に密接に関わっていることに気づいた。例えば、多様なイノベーション領域と多様な知性・能力領域の関係などが挙げられる。「組織のイノベーション」と一口に言っても、多様なイノベーション領域が実際には存在していることを私たちは見落としがちなのではないだろうか。

つまり、「組織のイノベーション」と呼ぶ際に、それは一体どんな領域や分野のどのような種類のイノベーションを指すのかを明確にしていないことが多いのではないかと思う。こうした問題は個人の発達にも当てはまり、古典的な理論であるが、ハーバード大学教育大学院教授ハワード・ガードナーが提唱した「多重知性理論」やアメリカの思想家ケン・ウィルバーが提唱した「発達ライン」という考え方が生まれる以前は、個人の知性や能力の発達に多様な領域が存在していることが見過ごされていたのである——厳密に発達心理学の歴史を辿ると、実はジェームズ・マーク・ボールドウィンが100年以上も前に多様な知性領域について優れた理論モデルを提唱している。

個人の知性や能力を育む際に大切になることは、どの領域のどのような知性や能力を発達させた
いのかを明確にすることである。組織のイノベーションを創出する際にもこれと同様のことが要求さ
れると考えている。

要するに、企業組織のイノベーションを創出するためには、当然ながらその他にも多くのことを勘案
する必要があるだろうが、創造性理論とシステム理論を絡めて考えると、当該組織の企業文化と所
属する業界の特質に照らし合わせて、「イノベーション」が何を意味するのかを明確に定義する必
要があるのだ。

これまで信奉されてきたような「イノベーション」という大雑把な概念からさらに一步深掘りし、社内で
イノベーションが意味するものは何なのかを明確に言語化することが必要だろう。個人の知性や能
力に個別性があるのと同様に、イノベーションにも個別性があり、他の企業が考えるイノベーション
と自社が考えるイノベーションの意味内容が異なるのはおかしいことではなく、ある意味当たり前の
ことだと言える。

そのため、自社の文化や属する業界特性を勘案して、グループ対話の実践などを用いて自社固有
の「イノベーション」の意味を掘り起こし、それを言語化しながら洗練させていくことが大切になるだ
ろう。

これは私の印象であるが、イノベーションがなかなか起きづらくなっていると嘆いている日本の大企
業の多くは、実際のところ、イノベーションに必要な知識や経験を社内に十分蓄積しており、イノ
ベーションを起こすだけの体力はありそうなのだ。

問題は、起こそうとするイノベーションの輪郭がぼやけており、明確な言葉の形になっていないので
はないか、ということである。この問題は、個人の知性や能力を涵養するときにも等しく見られる。つ
まり、多様な知性領域と能力領域が存在するにもかかわらず、自分がどの知性や能力を育んでい
きたいのかが不明確なケースが圧倒的に多く、結果として知性や能力の発達が一向に起きないの
だ。こうした現象は、組織がイノベーションを創出しようとする際にも当てはまるのではないだろう
か。

個人の知性や能力を涵養する際に重要なのは、自分の資質や関心と照らし合わせ、言葉を当てることによって発達させるべき知性や能力を浮き彫りにさせることなのだ。結局、個人も組織も言葉を蔑ろにし、言語化という実践に対して怠惰な風潮が蔓延している気がしてならない。

チクセントミハイが指摘するように、創造性を発揮する領域を真っ先に特定することが極めて重要であり、領域を特定するというのは言語などの記号体系を用いてなされるのが一般的である。イノベーションの領域が特定されていないと、それを創出しようとする試みは早晚徒労に終わるだろう。

こうしたことを考えると、イノベーションを創出しようとする組織にとって、言語などの記号体系を用いてイノベーションの形を浮き上がらせていくことが最初に要求されることだと思うのだ。具体的にはまず最初に、自社固有の企業文化という記号体系の読み解きが必要であり、業界特性という記号体系の読み解きがさらに必要になるのだ。

しかし残念なことに、多くの組織人は、こうした種々の記号体系を読み解く言語力がそもそも決定的に不足しているように思われるのだ。ましてや、文化や業界特性が集積した記号体系を読み解いた上で、自社固有のイノベーションを定義するという、新たな記号体系を言葉で構築していくだけの言語力も獲得されていないように思える。

そうしたことを考えると、「単に瞑想することによって創造性が獲得されうる」と主張するようなニューエイジ的発想を企業人は笑うかもしれないが、「イノベーション」というお題目を唱えることでイノベーションを創出しようとする企業人の態度をニューエイジャーは笑うだろう——もしどちらか一方を支持しろと言われれば、私は前者に軍配を上げるだろう。なぜなら、確かに瞑想によって創造性が発揮されやすい脳波の状態や意識状態を生み出すからである。これは「イノベーション」というお題目を唱えるよりもだいぶ効果があると思う。

両者を真の意味で笑うことができるのは、記号体系の読み解きと構築に耐えうるだけの言葉を鍛錬した者だけだと思うのだが……。

昨日、大学のメイン通りを歩いていると、フローニンゲン大学の関連グッズが購入できる店を発見したのでちょっと立ち寄ってみた。記念に大学の校章の入ったポロシャツでも買おうと思ったが、男性用のSサイズでも大きすぎであった。

不恰好になることを避けるため、女性用のMか、あるいはSサイズでもちょうどよさそうだったが、お目のデザインはあいにくの品切れであった。その代わりとして、“The university of library of Groningen”という100ページほどの薄い本を購入した。

この本は色彩に富んだ豊富なイラストと共に、フローニンゲン大学の大学図書館の歴史や特徴などについて解説している。ロサンゼルス在住時代、仕事が休みの日には心を躍らせて、カリフォルニア大学アーバイン校の図書館に終日通いつめていたことが実に懐かしい思い出として蘇ってきた。

実はそれ以降、私は図書館で勉強することをしなくなっていた。というのも、日本に一時帰国してから、書見台とバランスボールがないと作業効率が極めて落ちることを知ってしまったということと、基本的には書籍の重要な箇所を必ず声に出しながら読むようになったため、公共の図書館で勉強することができなくなってしまったのだ。

また、図書館に持たせる役割も以前と異なり、そこは勉強をする空間というよりも、むしろ良書を発見する空間となっている。要するに、図書館は勉強をする場ではなく、優れた書籍を見つけるためにある場所、という意味付けをするようになったのだ。図書館は良書を借りる場ではなく、良書を発見し、後ほど自分でそれを購入するための機会を提供してくれる空間なのだ。

フローニンゲン大学の大学図書館が今からおよそ400年前の1615年に設立されたことに対して、時の重みを感じざるをえない。私たちは時間と空間に縛られながら生きているはずなのに、こうした歴史あるものに触れた瞬間に、その歴史的建造物が時空を超えて現在の自分と出会うというそのことに驚きを隠せない。

フローニンゲン大学には、学科に応じて固有の図書館があるが、メインの図書館は大学を象徴する建物の真ん前に設立されている。このメインの大学図書館は、オランダの大学で唯一、建設時の場所から移転されることなく、その形を現在に残しているそうだ。

この図書館は400年前と変わらずこの場所にあり、これまで数多くの学生や教授たちが通いつめていたのだ、ということと思うと何やら感慨深いものが込み上げてきた。

現在は夏季休暇中で閑散としているが、図書館の中を覗いてみると、廊下の壁の至る所に絵画作品が掛けられているのに気づく。オランダという国は本当に芸術を愛する国なのだなと実感し、この国では芸術が生活の一部になっていることを感じる。

自分の自宅にも四枚ほど備え付けの絵画があり、そうしたところからも、この国は芸術と共にあるのだと思う。フローニンゲン大学の図書館には数多くの貴重な文献と共に、古代エジプトのパピルスに刻まれた文書なども所蔵されているそうであり、夏季休暇後に是非ともそうした歴史的資料を拝みたいと思う。

この図書館でどのような書籍と出会うことになるのかということも、今の私にとって一つの大きな楽しみである。

296. 叡智からの排斥

「学術的な叡智から自分は閉め出されている」ということを感じ始めたのは、ジョン・エフ・ケネディ大学での修士課程が終わり、ニューヨークで働き始めた時だった。当時の私はニューヨークに住みながら、隣接するマサチューセッツ州のLecticaでの仕事に従事していたのだ。

Lecticaの設立者である発達心理学者のセオ・ドーソンと共同で論文を執筆するプロジェクトが立ち上がった時——結局このプロジェクトは実を結ぶことはなかった——、先行研究を調査する必要に迫られ、幾つかの学術論文をワード一枚程度に要約するタスクが与えられた。

当時、私は正規の大学研究機関に属していなかったため、論文を入手するのに苦労したことを覚えている。もちろん、論文のタイトルをインターネット上で検索すれば、大抵どのようなものでもすぐ

に出てくるのであるが、それらがPDFとして誰でもダウンロードできる形でネットの世界に転がっているとは限らず、有料で閲覧・ダウンロードしなければならないケースも多かったのだ。

このとき以上に、「学術的な叡智から自分は閉め出されているのだ」と感じたことはなかった。本来、研究者や学者の役割は、自分の研究や探究の結果として得られた知見を私的な所有物とするのではなく、広く公的なものにしていくことによって、学術的な知の発展に貢献することにあると思う。

実際に、多くの研究者や学者はそうしたことを多かれ少なかれ意識しているのだろうが、いかにせん、未だ無数の論文が一般の人たちにはアクセスできない形で存在していることも確かなのである。ニューヨーク在住時代から、数多くの学術論文を発掘し、実際に手にとって読む機会にも恵まれてきたが、その過程の中で学術機関に属していない私には読みたくても読めない論文があったのも確かである——もちろん論文一本のダウンロードに対して、それなりの金銭的対価を支払えば閲覧することはできたのであるが。

当時のことを思い出しながら、フローニンゲン大学が提供するオンラインの文献閲覧サービスの有り難さを感じている。先ほど試しにこのサービスを使ってみたが、数多くの専門書や学術論文をオンライン上で閲覧・ダウンロードできるのだ。

オンライン上で書籍や論文にラインマーカーを引いたり、メモを取ることが可能であり、引用したい箇所があればそれ専用のボタンをクリックするだけで、引用に適した形でワードに文章を簡単に挿入することができたりする。

こうしたサービスは正規の学術機関に属していればどこでも提供しているような類いのものだろうが、逆に言うと、そうした機関に所属していないとアクセスできない学術的な知が無数に存在していることを証明している気がしてならない。

こうしたシステムは自分の研究を進める上で非常に有益であり、とても有り難いことなのだが、こうしたサービスを使うことができず、長らく人目につかない在野で研究をしていた時の自分を思うと、学術的な知にアクセスすることに関してひどく不平等な状況が実は存在しているのだ、ということをおぼろけにはいられない。

以前から薄々感じてはいたが、もしかしたら拙書などを通じて、発達理論に関して多くの方に誤解を与えてしまっているかもしれないと思った。発達理論と思い込んでいるものを学び始めると、「段階モデルはとても有益だと思います。ですが、これだけでは実務的な応用に関して限界がありますよね」という趣旨の疑問が湧いてくるのではないかと思われる。

これは至極ごもつともな指摘なのだが、見方を変えると、「発達理論」と呼んでいるものの意味とその範囲を取り間違えている可能性が高い。実際のところ、発達理論というのは、発達心理学の一領域に過ぎず、さらに発達心理学は「発達科学」と呼ばれる分野に包摂されているのだ。

本来、発達理論だけを取り出して学ぶことは不可能であり、発達理論を真に学ぼうと思うのであれば、自ずと母体となる発達心理学、ひいては発達科学までを射程に入れて学習を進めなければならないと思っている。発達科学の中身は多様な領域で枝分かれしているが、私は自分の探究を「知性発達科学」の中に位置づけ、人間の知性や能力がどのように変化・発達するかのプロセスやメカニズムの解明に関心を持っている。

正直なところ、人間の知性や能力の変化・発達について探究しようと思うと、私の目の前には多様な学問領域が自ずから広がってくるのだ。例えば、哲学、他の心理学領域(例:社会心理学、認知心理学、進化心理学、生態心理学、環境心理学、etc.)、脳科学、システム科学などに関する理解を深めないと、どうしても人間の知性や能力の変化・発達に関する探究が行き詰まってしまう。

ここで何を主張したいのかと言うと、上記で列举したような哲学や他の学問領域を包括して「発達科学」というものが構成されているため、その構成要素である発達理論というものを狭い視野で限定的に捉えない方がいいということだ。

最たる例は、発達理論を「段階モデル」だと思い込んでしまう限定的な見方だろう。発達理論は決してロバート・キーガンが提唱しているような段階モデルだけではないのだ。発達理論には、人間の知性や能力が発達することに関係する様々な概念や他の理論がふくまれていることを忘れてはならない。

仮に発達理論を段階モデルだとみなす限定的な見方を採用してしまった場合、そうした見方は発達理論の概念的説明力と実務的応用力を大きく希薄化させてしまう危険性がある。

昔、キーガンが私たち発達心理学徒に向けて興味深い発言をしていた。「この分野に足を踏み入れてしまったが最後である。もう君たちはこの分野から逃れることはできなくなり、一生涯をかけてこの分野と付き合っていく必要がある」という内容の言葉をユーモアを交えながら私たちに投げかけていた。私はまさにキーガンの言う通りになってしまった。

私たちが存在している世界は変化する現象で満ち溢れている。これは否定しがたい事実であり、生命に類似した性質を持つ有機体であれば、個人も組織も社会も全て変化する存在であると言える。

もし私たち自身の変化や組織・社会の変化のプロセスとそのメカニズムに関心があるのであれば、変化を扱う発達理論は避けて通れない分野だと思うのだ。日本でも少しずつ、ロバート・キーガンを始めとして発達理論が日の目を見るようになってきているが、それらは発達科学という氷山のほんの一角に過ぎない。そのため、それらを表面的に学習して探究を終えるのではなく、そこからさらに探究を進め、広大な発達科学の領域に足を踏み込んでいただきたいと思うのだ。

私たち自身と私たちを取り巻く無数の変化する存在に対して永続的に関心を持つのであれば、少しずつで良いので一生涯をかけてゆつくりと発達科学に親しんでいく必要があるように思う。私は完全にこの分野に捕まり、一生逃れることはできないとわかりながらも、牛歩のような探究速度と共にこの分野と一生付き合っていこうと腹を括っている。

298. 予知夢と時の扉

—偶然はそれを受け入れる準備ができた精神にのみ訪れる—ルイ・パスツール

昨日夕食を食べている時に、不意に奇妙な感覚に襲われた。食卓から眺めているこの景色をオランダに来る遥か前に見たことがある、というものだった。厳密には、食卓の窓から眺める景色と、ここでこのように夕食を食べている光景をだいぶ昔の夢で見っていたのだ。

これは「予知夢」や「既視感(デジャブ)」と呼ばれる現象かもしれない。非常に不思議な現象である。そもそも日本において「欧州への学術留学」と言えば、イギリス、ドイツ、フランスが真っ先に候補に挙がるだろうが、なぜ私はオランダを選択したのかについて考えていた。

オランダのフローニンゲン大学は、発達心理学と複雑性科学を架橋した研究のメッカであるから、という理由はごもつともなのであるが、それよりも根本的な何かが自分の中にある気がしてならないのだ。

そうだった。私は10歳の時、オランダのデン・ハーグに本部を置く国際司法裁判所で働くということを決めていたのだ。社会の資料集に掲載されていた国際司法裁判所の写真を見て、「自分は将来必ずここにいる」ということを感じ取っていたのだ。

それから20年の時が経った。確かに今の私はデン・ハーグにいるわけでもなく、国際司法裁判所の判事でもないが、幼少時代のあの時に感じた理由のない直感が機縁となって、今この瞬間に知性発達科学者としてオランダのフローニンゲンという街にいるのだ、という確かな感覚があるのだ。

これは一体何なのだろうか？ サンフランシスコにあるフィルモア通りの最も海拔が高い場所からサンフランシスコ湾を眺めた時、自分が生まれてきた意味と自分が生きて行く意味を、啓示的な伝言と共に知ってしまったあの時もそうだった。

自分が進むべき道は自己を超えた何かと常に繋がっており、超越的存在者と無意識的な自己との共同作業によって、私が意識しないところで進むべき道の全てが決まっているような気がするのだ。そうなのだ。今この瞬間に私がオランダのフローニンゲンにいることは、20年前のあの日、社会科の資料集を眺めた瞬間に決まっていたのかもしれない。あるいは、それ以前から何らかの働きかけが私をその資料集へと向かわせていたのだから、遥か以前からこの地に自分がいることが決まっていたのかもしれない。そんなことを思うのだ。

私は、「運命はあらかじめ決められている」というような決定論者ではないし、「全ての運命は確率的に決められるものである」という確率論者でもない。「世界における全ての現象がある一定の規則に基づいている」というような決定論的な立場を取るのでもなく、逆に、「全ての現象は単なる偶然によって起こる」というような非決定論的な立場を取るのでもない。

私はそうした極端な立場の中庸に立ち、自分の意識の範疇を超えた大いなる自己が何らかの道を私に与え、私という小さな自己はその道を前後左右しながら歩いていく、そんな考え方を持っている。これはダイナミックシステム理論の思想と近いものがあるだろう。

私がどうしてダイナミックシステム理論に惹かれ、フローニンゲン大学でこれを深く学ぼうとしているのかわかった気がする。ダイナミックシステム理論が包摂する種々の概念や方法論に魅力を感じているということ以上に、思想的に共鳴するものが多分にあるからなのだ。

過去の時間が現在の私に押し寄せてくる。未来の時間が現在の私に押し寄せてくる。過去現在未来というのは、地球上に存在する諸々の大陸のようなものなのではないかと最近思う。

私たちはとにかく、過去と現在と未来を分離しがちである。だが、果たしてそれらの三者は本当に分離したものなのだろうか。それらを分離させてしまうことは、本来は空気と地面という同じもので続いているはずの大陸をあれこれと分割させることに等しいのではないかと思う。

「日本」と「オランダ」という名称は、人間の都合上で勝手に区別されたものにすぎない。本来は、両者は同じ空気と地面で分けがたく繋がっているのだ。こうした関係は、時間の区分においても等しく当てはまるのではないだろうか。

五年半前に米国に渡って以降、こうした感覚が徐々に芽生えつつあったが、昨年の東京滞在期間中にこうした感覚に対して確信を持つと共に、少しずつ言葉を与えられるようになってきた。自分なりの言葉が与えられるようになってくると、より一層こうした時間感覚が自己を包み、今の私はそうした時間感覚の中で生きていると言えそうだ。

日々を愚直なまでに懸命に生きることによって、時の扉が目の前に現れる。そして全身全霊で時の扉を叩くとき、真の時間の中で私たちは生きることができるのではないだろうか。

休日の今朝は、フローニンゲンの街を代表するサッカーチーム「FCフローニンゲン」のスタジアムまでランニングをしてきた。いつもと違うコースを走るというのは、何かと新しい発見があり、実に新鮮である。

街中を走っていると、近くの公園を走っている時とはまた一味違う意識状態の中で体が動いているのを感じる。FCフローニンゲンのスタジアムを遠目で確認することができ、スタジアムに向かっていく感覚が強まるにつれ、逆にこれからの生活の中で何か手に負えない類のものがひたひたと自分の身に迫ってきているのを感じたのだ。

この瞬間、自分が再び生まれ変わる時が近づいているのかもしれない、と察知した。より正確には、この世で生を受けた時に現れ出た自己が成熟を迎え、その自己から超出していくような時期が近づいてきているのを感じたのだ。

私たちは生誕する時に、産みの苦しみを覚えることはない。もちろん、トランスパーソナル心理学の代表的な研究者であるスタニスラフ・グロフの理論に従えば、母親のみならず、生まれ出てこようとする私たち自身も何らかの苦しみを経験しているというのは確かだろう。

しかし、それらの苦しみに関する記憶が無意識の領域に残っていたとしても、顕在意識の領域でその記憶を思い出すことはなかなかできない。また、生まれ出てこようとする苦しみ自体を私たちは自覚的に経験しているわけでもないのだ。

一方、このように生まれ出てきた私たちの自己が成熟を迎え、それを超え出ていくような段階に至って初めて、再び生まれ出てくる自分自身に対して産みの苦しみを初めて経験することになるのだと思う。構造的発達心理学で言うところの「トランスパーソナル段階(自己超越段階)」というものが何を意味するのか、そしてそこに到達する際に経験しなければならない「人生の暗夜」というものが一体どのようなものなのかということ、経験的に掴み始めている気がするのだ。

アメリカの思想家ケン・ウィルバーが自らの思想区分を「第二期」と呼んでいた時代に提唱された意識の発達モデルを改めて眺めてみると、私たちの意識は生まれ出てから一つの円弧を描くように再び元の位置に戻ってくるような図が提示されている。

これは生誕したのと同じ段階に退行するというような意味では決してないし、生誕時の未分化の世界観を礼賛するようなロマン主義的な見方でもない。自分の身に迫りつつある「この感覚」に忠実になろうとする時、ウィルバーが提唱したこの円弧を描くような図が重要な意味を持ち、そして否定することのできない妥当性を持ち合わせているような気がするのだ。

この半年間を境目とし、自分の知覚世界が独特の様相を帯びるようになり、毎日の自分の世界の捉え方や感じ方は新生児が経験していることに近いと思っていたのは、こういう理由からだっただけではないかと腑に落ち始めている。こうした気づきに至るために、そして再び生まれ変わる自分に戻ってくるために、オランダという随分と辺鄙な場所に来てしまったものだと感じざるをえない。

300. 「美」と「組織のイノベーション」に関する脱神秘化

—学術論文とは、人類への手紙である—ウンベルト・エーコ

森有正先生の全集のどこかで、バッハの音楽は主観的・直感的に生み出されたものではなく、客観的に秩序化された音楽的方法論に基づいて生み出されている、というような記述を見かけたことを覚えている。つまり、バッハは自分の音楽を独自に方法化し、その方法論に従って優れた楽曲を多数輩出していたと言える。

逆に言えば、私たちが自らの活動領域で客観的に秩序化された方法論を体系化することができれば、その領域内で美を顕現させることができるのではないだろうか。実際に、辻邦生先生はまさにこの実践を真摯に遂行され続けた方だと思うのだ。

辻先生の『パリの手記』や『小説への序章』を読んでいると、文学作品を通じていかに美を創出することができるのか、という美の創出メカニズムの解明と方法論の確立に絶えず試行錯誤していたことが伺える。

仮に美を生み出すメカニズムや法則が客観的に記述可能なものにまで体系化を推し進めることができれば、それは教育可能なものになると思うのだ。そうでなければ、芸術的な創造的行為はいつまでもたっても表現者の中だけの所有物となってしまう、それは自然発生的に生み出されるような「偶然の産物」として崇め奉られるだけのものに成り果ててしまうのではないかと思う。

私はどうしても三人称的のっぺらぼう言語で構築されやすい学術論文に対して、文学作品の様相を帯びさせることはできないか、と思案していた。要するに、「真」の領域を司る科学論文を「美」の領域を司る文学作品のような形式で書くことはできないか、ということを考えていたのだ。

科学論文とはいえ、やはりそれを多くの人たちに読んでもらう必要があるし、何よりも自分の実存性を文章の中に込めたいと思った場合、どうしても三人称的な言語を用いているだけでは不十分なのではないか、と思ったことがきっかけにある。

学術論文の形式上、文学作品とまるっきり同じ形式で執筆することは不可能だとしても、文学的な何か、文学でしか表現しえぬものを科学論文の中に組み込んで執筆したいと思うのだ。無機質な、魂の抜けた科学論文に価値を見出すことは、私にとっては到底できない芸当である…。そうした文章では何も伝わらだろうし、さらなる知の開拓に資するだけの人類への手紙になりえないと思うのだ。

もちろん、知性発達科学者として最優先しなければならないのは、紛れもなく、人間の知性や能力の発達法則を発見することだろう。しかし、それと同時に、学術論文の中に美を宿すための法則性や方法論を発見することも怠りたくはないのだ。

幸運にも、美が体現されている学術論文とこれまでいくつか出会ってきているが、そこに客観的に説明可能な美の創造メカニズムが隠されていることは自分の中でかなり明確なのだ。あとは、それを少しずつ言葉にしながら、自分の中で法則性を構築し、実際に論文を執筆するという実践の中で方法論を彫琢し続けていくことが必要になるだろう。

これまでの話は「美」の方法論的創出に限定したものであるが、これは例えば、個人の創造性を涵養することや組織のイノベーションを創出することにも等しく当てはまることだろう。つまり、個人の創

造性や組織のイノベーションに関しても、客観的に秩序化された方法論を構築することが可能なのではないか、ということだ。

もし仮にこれが不可能だと一蹴されるのであれば、創造性やイノベーションの発生プロセスとメカニズムを科学的に探究している研究者の存在意義は無くなってしまいうだろう。自分を含め、彼らが試みているのはまさに、創造性の発生プロセスとメカニズムを解明することであり、研究成果から創造性やイノベーションの創出に関する具体的な実践技法を編み出すことにあるはずだからだ。

発達心理学という学問分野が確立される以前は、おそらく人間の発達は神秘的なベールに包まれており、それこそ「氏か育ちか」という論争のようなもので存在していたのだ。これと同様に、現代においては、創造性やイノベーションという現象が未だに神秘的なベールに包まれていると思う。

それだけではなく、創造的な人間を崇めたり、組織のイノベーションを偶然の産物のように捉えることによって、私たちはそれらを逆により一層神秘化することさえ行っている、と言えるのではないだろうか。

近年において、創造性やイノベーションに関して応用数学のダイナミックシステム理論を用いた研究が広まりつつあるのは、まさにこうした社会的な風潮に抗うためなのかもしれない。創造性やイノベーションがいかに複雑な現象だとしても、「全ての動的なシステムが作り出すカオス的振る舞いの背後には法則性が隠されている」というダイナミックシステム理論の原則的な考え方を適用し、創造性やイノベーションに関して脱神秘化を試みたいと思うのだ。

特に組織のイノベーションというのは、組織的な知性や能力の産物とみなすことができる。そうであれば、それらは個人の知性や能力と同様に、何もないところから偶発的に生まれるような類いのものでは決してない。

それらは組織的な知性や能力の一つとして体系的に育むことが可能であり、バッハの音楽や辻先生の文学作品のように、体系立てた形式的な手順で創出が可能だと思うのだ。この手順の発見と構築は、私にとってフローニンゲン大学での一年目の重要な探究課題となるだろう。